

フィールドワーカーが拠点を移すということ —教育・研究への影響と新発見

永 田 貴 聖¹

1. はじめに

2020年2月以降、世界中に恐怖をもたらした「新型コロナウイルス感染症（Coronavirus disease 2019：COVID-19）」における行動制限への影響に関する研究はすでに膨大な数があり、ここでは多くの紙面を割くまでもないだろう。宮城学院女子大学キリスト教文化研究所・共同研究「多民族における宗教と文化」においても幾度か、「コロナ渦」における研究活動が焦点とされてきた。間瀬（2022）は、自身がサバディカル時の2020年10月から2021年3月まで滞在したりヨン第二大学の寮での生活とフランス人学生や研究者たちが直面するロックダウンや生活への葛藤やそれらへの対抗策、不足する物資や、人間関係の継続を求める様々な発信や主張、運動について、実際に見たり聞いたりしたことを基に、学術的に論じている。

さらに共同研究内では「コロナ渦の社会—世界の事例から—」研究会が組まれた（八木 2024）。これらは、フィールドワーク調査を実施することにより研究をすすめる人類学者が、時には強制力を伴う行動制限が実行される社会において、いかに人々が創意工夫をして他者との関係を維持してきたのかを、文化人類学者自身の調査が制限されていたことを含め、学者自身の調査先における社会活動に焦点を当て、検討している。

本論文では、なんらかの形でフィールドワークらしきものを行う教員たちが調査対象先や学生とともに訪問する、もしくは訪れることを予定している地域や集団、個人と関係を作る過程に焦点を当てたい²。それは、仮に「コロナ渦」ではなかったとしても、フィールドワークや学外学習を実施する大学教員にとっては、教員自身の研究がゼミで行う教育活動や学外実習としてのフィールドワーク活動に最も影響を及ぼし、「研究」と「教育」が連動し、ゼミ活動内のなどの教育実践が構築されているかの振り返りや検討につながるからである。さらに、本文が注目する内容は、私自身が経験した2020年4月から赴任した大学におけるゼミ活動としてのフィールドワークがいかにして構築されたのかを論じる作業である。これは、赴任した2020年4月に始まるわけではない。私が、現在の職位の募集をみて、応募し、面接を行い、採用されるまでの過程、さらに研究者自身が、居住地域を移転し、生活が変化することなども含まれている。そして、これまで京都市を中心にフィールドワークを実施してきた私がかつとも悩んだのが赴任先大学の学科教育において、実践的なゼミナール活動を行

¹ 宮城学院女子大学 現代ビジネス学部現代ビジネス学科 教授

² しかし、大学の教務や学生生活への行動制限についての記録的な論考はこれまで膨大にあるので、ここではそれらの検証は実施しない。

うことを求められていたことであった。遠方の大学への赴任が決まったため、自身のフィールドやその関連のグループ、団体に学生を連れてゆくことは現実的にできない。また、そこに「コロナ禍」が重なったため、「合宿」として、宮城県仙台市から関西地方に行くこともできなかった。

そこで本文では、他地域から赴任する文化人類学者がいかにしてフィールドワーク実習を伴うゼミナール活動プログラムを作成するのかを、赴任直前から赴任後、2021年3月末までを区切りとして回想的に検討を試みたい。そして、この時期はまさに「コロナ渦」だったわけである。「移動する人々」に注目してきた「比較的自由に移動できる研究者」が移動できなくなった状況から構築する様々な関係について、現在、文化人類学において注目されつつある研究者自身の動向に注目する「オートエスノグラフィ³」の視点を意識しながら、考察し、その動向を検討する。

2. 2019年末から2020年3月―赴任前

宮城学院女子大学現代ビジネス学部「多文化共生論」の教員募集が始まったのは、おそらく2019年9月頃である。書類選考を通過し、最終面接に呼ばれ、採用決定の通知を受け取ったのは確か12月頃であった。当時、私は、京都市に在住し、週3日程度フィリピン人介護福祉士候補生を受け入れていた奈良県の某社会福祉法人で、候補生たちの日本語と試験対策について指導を行うのが主な収入源であり、ほかの日は大学の非常勤講師をいくつか掛け持ちしていた。

まず、これらの勤務先に当該年度限りの退職を申し出た。また、後任者を紹介した。さらに、生活拠点を移す準備も必要である。これらは大学教員なら、赴任先が変わったりする場合に誰もが経験することである。ところが、私は赴任先大学において、学外活動を伴う少人数クラスを担当する必要があり、これから担当するだろう学生たちとともに訪問する先を探す必要があった。長年、私は文化人類学を専門とし、日本と韓国に在住するフィリピン人移住者の社会関係について調査してきた。その関係で、日本移民学会、日本文化人類学会の会員であり、フィリピン研究会全国フォーラムという研究会に携わり、文化人類学者、移民研究者、フィリピン地域研究者などと親交を深めてきた。宮城県仙台市への赴任にあたり、応募時から地域の外国人移住者や、国際交流施策について最初に相談し、助言をうけたのが、同じ移民研究仲間であり、仙台市の他大学に勤務するI先生であった。特に、I先生からは宮城県や仙台市の外国人への施策や、行政系の国際交流団体の活動などについての情報をいただいた。さらに、年が明けた2020年1月末にI先生が勤務する大学の研究会に招聘いただき、仙台市に訪れる機会を得ることになった。こちらの大学から許可をいただき、研究会終了後も数日間滞在し、新居を探すこともできた⁴。すべてが順調にみえた。しかし、2月頃から海外で新型コロナウイルスが流行し始めているというニュースが流れつつあった。もはや説明するまでもないが、2020年3月以降は、行動が大きく制限されることになる。

赴任に際し、不安が一つあった。両親が高齢だったことである。両親は当時70歳代後半から80歳

³ ただし、これは「オートエスノグラフィ」と言ってもあくまでの私の経験の一部を記述するものであり、「オートエスノグラフィ」と言ってもよいのか悩むところではある。「オートエスノグラフィ」に関する議論は川口(2019)を参照されたい。

⁴ この場合、延長した日数の宿泊費は私が負担している。

代であり、体力的にかなり衰えつつあった⁵。当時、兄と姉が健在だったので、京都市から仙台市への赴任を決めたが、もし、両親のこどもが私のみであったなら、そもそも教員募集に応募していたかはわからない。また、関西地域と仙台市が空路なら1時間程度というのも赴任を決めた大きな要因であった。赴任後も、京都市でのフィリピン人移住者の研究を継続するつもりだったので、1時間の空路で関西に移動することができることはとても助けになる。そう考えていた。

3. パンデミック拡大の影響

ところが、これの目論見は COVID-19の拡大によって大きく頓挫することになる。そして、最大の懸念が、赴任後、学生とのフィールドワークができるのかどうかであった。私は、日本に住む外国人移住者について調査する研究者として最も重要なのは、外国人移住者当事者と直接会い、さまざまなやりとりを行うことであると考えている。そして、「多文化共生論」を担当する教員として、また、外国人をルーツにもつ日本で生まれ育った人間として⁶、重要なのが、実際に学生たちが外国人移住者たちと直接的に関わることであると考える。そのことと同時に、日本において、外国人移住者が置かれている様々な権利の制限などを文献などにより学ぶことが必要である。

特に、外国人移住者たちが、「異」なる文化背景を持つ存在であっても、決して、すべてが「異」の存在ではないことを実際に経験する必要がある。直接的に関わることで、人々は世間の排外主義者たちが流す誹謗中傷や差別的言動が間違いであることにも気づきやすくなる。

さらに、地域に住む日本人や、外国から移住してきて数十年、数世代が経過している人々の中には、新規に移住する人々と日常的な関係を構築しようとする人々も決して少なくない。これらの人々が展開するさまざまな試みに参加することが必要であると考えている。文献や統計から関連知識を得ることはもちろん重要である。しかし、それだけでは見えないものを見えるようにするのが「顔の見える関係⁷」ならぬ、「顔のみえる関わり」だと思っている。

ところが、現実的に、行動が制限されている。しかし、実際に多くの人々の健康が脅かされているのも事実である。当時、大学という空間は感染症を拡大する危険性が高いことが懸念され、ほとんどの大学で授業がオンラインや遠隔での実施となった。本学も授業開始が、大型連休以降の5月7日となった⁸。

2020年度は、2年生、3年生ともゼミである「実践演習」や「研究演習」が開講され、私もその1クラスを担当することになった。この年度は、所属学科でのカリキュラムが変更されたので、私が担

⁵ 若干、私の個人的なことになり恐縮であるが、両親が20年近く前に、離婚し、別居していたので、介護などが発生した場合は別々に対応する必要があった。

⁶ 私のルーツについては、永田（2011、2016）を参照されたい。

⁷ 若干古い研究ではあるが、社会学者である山本・松宮（2010）は在日ブラジル人・ペルー人の集住地域である愛知県西尾市などでの調査から「外国人とのつきあい」が高い割合の住民が、外国人が近隣に住むことに肯定的であると分析している。また、文化人類学者である小田（2009）は、持続的でローカルな生活の場での〈顔〉のある関係性は、メディアなどで報道されている間接的な情報よりも、人々がある他者の情報を構成する場合に大きな効果を発揮するとして、持続的でローカルな〈顔〉のある関係性を重視している。

⁸ 詳細は「<https://news.mgu.ac.jp/important/info/1078.html> 宮城学院女子大学 新型コロナウイルス（COVID-19）への本学の対応（まとめ）2020年2月～2021年3月 2025年2月27日検索」を参照されたい。

当する講義科目は「多文化共生論」、「グローバル社会論」、「多文化社会とビジネス」など新規開講科目であった。そのため、2年生はこれから受講し、3年生は私の講義科目を受講できない。当然、よくわからない新任教員のゼミは誰も選択しないとだろうと考えていたのだが、赴任前に、2年生、3年生とも定員である9人満席であることを聞かされ、さらに焦っていた。

4. 焦った末の行動

その焦った末に行った行動というのが、まずは地域の外国人移住者や、日本人住民との交流等々の情報を得るという事であった。ところが行動が制限されている。しかし、幸い(?)にも、授業開始が1ヶ月遅れることとなっていた。最初に行った行動は、フィリピン人移住者による自助活動のリーダー的存在で愛知県を拠点に活動するBさんに連絡を取り、「仙台で誰かフィリピン人の知り合いいない?」ということであった。その時に、仙台を中心に活動するフィリピン人グループのリーダー的な方を紹介してもらった。しかし、連絡を取ってみると、「落ち着いてから会いましょう。」ということであった。

この間、授業が5月7日に始まり、ゼミはZoomを使つての開催となった。はじめて担当するゼミの学生たちとは画面越しでの初対面となった。これが「顔の見える関係」なのかは相当不安な始まりとなった。ゼミの内容も、私の担当講義科目をもはや受講することができない3年生には、本来「多文化共生論」で行う予定だった内容を、より深く掘り下げ、さらに、文献を読む課題や、映像資料なども観ての感想の提出などを課した。また、Zoomのブレイクアウト機能を活用したグループワークでの意見交換などを頻繁に行った。当時、知識の定着以上に意識したのは、学生たちが健康状態を維持する事であった。学生の中には遠方からの一人暮らしで、実家に帰れなくなった学生もいた。

次に、6月になって、先述のI先生を通じて、県国際化協会の関係者であるOさんにお会いすることができた。Oさんは宮城県だけではなく、全国的な外国人移住者の現状について精通している方で、私が関西在住時代にお世話になった外国人移住者支援を行う専門家たちともかかわりが深い方であった。Oさんには石巻市でさまざまな外国人支援活動行っている地域の元商工会議所職員の方を紹介いただき、気仙沼市にインドネシア人漁業労働者や技能実習生が多く、実際に技能実習生を雇用している建設会社Sが、インドネシア料理レストランや、レストランの向かいにイスラム教のムショラ（礼拝所）を作ったりしていることなどの情報を教えていただいた。早速、私は、夏から秋にかけて、お会いするために現地に赴くことにした。そして、以前、名古屋市に住むフィリピン人のリーダー的な方に紹介された仙台在住のフィリピン人グループのリーダーたちと会えたのも7月であった。大学の前期は、授業はオンラインだったものの、ようやく地域の外国人移住者の状況を理解するための基礎ができていった。

5. 最初の引率フィールドワーク

そして、学生を引率しての最初のフィールドワークとなったのが、在仙台ベトナム人グループSTの日本語サロンへの参加であった。このグループのリーダーであるTさんは、彼の配偶者の留学のため、数年前までは大阪府豊中市に住んでいた。ちょうど、私が赴任前に書いた著書（永田 2019）

のフィールドワークのため、この地域の国際交流協会とかかわりがあった。仙台市に赴任が決まったときに、この協会の事務局長さんにそのことを報告をした。すると、「ぜひ、仙台に行ったら会ってほしい人がある。」と紹介されたのが、T さんだった。T さんは大阪府豊中市に在住していた当時、この協会では日本語学習やさまざまな活動を行っていた。また、ベトナム人同胞のための親睦会も結成していた。その後、配偶者の方が大学の職位を獲得したことに同行し、数年前に仙台に移住していた。そこで、事務局長さんから教えてもらった T さんのメールアドレスに連絡を取った。T さんは、仙台でもベトナム人同胞が集まるためのさまざまな活動を行っていた。その 1 つが日本語サロンで、日本人とベトナム人が日本語を通じて交流することや、日本語教師ボランティアが来日したばかりのベトナム人に日本語を教える活動である。当時、このサロンを週に 1 回、仙台国際センターで開催していた。私がはじめて行ったのは 8 月である。行ってみて驚いたのは、ベトナムの方々だけではなく、日本に旅行中に COVID-19 が拡大し、帰国できなくなったペルー人もいたことだった。わたしも週末に行われるこの集まりに参加するようになった。

そして、一つの考えが浮かんだのである。この集まりには学生ボランティアや仙台市周辺の大学に通うベトナム人留学生たちも参加しており、私が指導するゼミ生がいろいろなことを体験するには非常によいのではないかと考えた。早速、T さんに相談したところ、是非来てほしいということだったので、大学での対面授業が再開される 9 月からゼミ生を連れてこちらに行くことにした。

私が所属する現代ビジネス学科は、当時「ビジネス実践演習」という 2 年生から 3 年生担当ゼミクラスでは、テーマに応じた学外での実習やフィールドワークを奨励しており、学生の交通費なども捻出でき、実習費も予算化されていた。ところが、コロナ渦となった影響で、私を含めた教員陣はこれの使途にたいへん困っていた。また、9 月から対面授業が始まるといっても、マスク着用の継続や、校外での実習には事前許可や書類の届け出、感染防止策の徹底など多くの制約や義務があった。

とはいえ、学生たちを引率しての宮城学院女子大学で経験する初めてのフィールドワークが実施できることとなった。この日やってきた 2 年生 9 名とは、それまではオンライン上で会っていたが、このフィールドワークが初めての直接の対面となった。その後、2 年生たちは 2 名から 3 名程度でローテーションを組み、週に 1 回は日本語サロンで活動することとなった。後にこれらの成果は学科企画の報告会で発表されることになった⁹。

6. おわりに代えて—在日韓国人団体への訪問と大きな心境の変化

当初は 3 年生から 4 年生に開かれる卒業論文執筆のための「ビジネス研究演習」ゼミの学生も参加させたかったのだが、こちらのゼミは学外活動を想定していない予算配分だったため、難しかった。しかし、さすがに、予算の問題があるとはいえ、ある学年だけフィールドワークを行い、ある学年では実施しないのはよくない。そのため、宮城県国際化協会に訪問し、活動について話を聞く機会も作った。また、学生の多くは韓国のポップカルチャーのファンであった。どの程度関係しているの

⁹ 2021 年 1 月 20 日に学科企画「国境を越える人びとと交わる地域・ビジネス・企業・大学」が開催された。詳細は (<https://news.mgu.ac.jp/bz/news/1977.html> 宮城学院女子大学現代ビジネス学部サイト 検索日 2025 年 2 月 15 日) を参照されたい。

かわからないが、在日本大韓民国民団宮城県地方本部に訪問する機会を作ることができた。3年生のゼミ生の1人が高校時代から民団宮城文化センターの韓国語教室に通っており、日韓交流の拠点なっていることを話してくれたからであった。正直、民団はたいへん堅いイメージがあったが、この学生が言う通りに、恐る恐る連絡したところ、長く事務局長を務めるKさんが大変丁寧に対応していただいた。その結果、1月下旬に2年生と3年生民団宮城に訪問し、在日韓国人同胞の相互扶助や民団宮城文化センターでの韓国語教室を通じた地域での活動について話を聞くことができた。

永田（2011、2016）でも触れているように、私は韓国人の祖父母を持ち、親は私の生前に日本国籍を取得した人間である。そのため、私自身「韓国人」も「外国人」も経験したことがない。また、韓国や朝鮮は、私が赴任する前になって、韓国でフィリピン人の調査をすることや、偶然にも、調査で関わっていたフィリピン人たちが在日コリアンと関わるようになったことなどでようやく機会が増えたものの、それほど多くなかった。学生たちのおかげで、大阪の民団で長年にわたり活動していた母側の祖父母に想いをはせることとなった¹⁰。

本論文では、「移民研究」という活動と他地域への「赴任」が結びつき、「教育」が作られる過程を断片的であるが回想してきた。コロナ渦という行動が制限される困難もあったものの、この過程を振り返る意義があるのではないかと思う。偶然的な「再会」もあった。

【参考文献】

- 小田亮．2009「生活の場としてのストリートのために―流動性と恒常性の対立を超えて」『国立民族学博物館調査報告』81号：489-518。
- 川口幸大．2019「東北の関西人―自己/他者認識についてのオートエスノグラフィ」『文化人類学』84-2：153-171。
- 永田貴聖．2011『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版。
- 永田貴聖．2016「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在―政治的な日韓関係を越える関係についての試論」『生存学』9号：94-107、生活書院。
- 永田貴聖．2019「国流に集まる人びと」『外国人と共生する地域づくり―大阪・豊中の実践から見てきたもの』（牧里毎治 監修、公益財団法人 とよなか国際交流協会 編）、p. 125-139、明石書店。
- 間瀬幸江．2022「コロナ禍フランスの大学生生活断章～2020年度後半を中心に～」『多民族における宗教と文化』25号：17-26、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所。
- 八木祐子．2024「『コロナ渦の社会―世界の事例から―』研究会について」、『多民族における宗教と文化』27号：33-34、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所。
- 山本かほり・松宮朝．2010「外国籍住民集住都市における日本人住民の外国人意識」『日本都市社会学会年報』28号：117-134。
- ※ウェブサイトについては注に掲載している。

¹⁰ その後、私が民団宮城とどう関わるのかについては別に機会に検討することとする。